

朝霧の巫女事典

最終版

ゾック神社 編

凡例

一、一つの事物に複数の表記法がある場合、この事典内での記述は 1：朝霧の巫女本編、2：昭和霊異記、3：日本書紀、4：古事記、5：その他の文献の順に優先し、その表記に従う。これは、朝霧の巫女中の表記が基本的に日本書紀準拠であるため。

一、文中に単に○話○とある場合は、原作漫画「朝霧の巫女」の単行本における当該話のことを指す。

一、アニメ版や昭和霊異記のことを指す場合は、その旨を記述する。

一、このように下線が付いた言葉は、この事典内に項目が存在する。

目次

<u>あ</u>	<u>5</u>	<u>は</u>	<u>57</u>
<u>い</u>	<u>14</u>	<u>ひ</u>	<u>59</u>
<u>う</u>	<u>21</u>	<u>ふ</u>	<u>62</u>
<u>え</u>	<u>22</u>	<u>へ</u>	<u>-</u>
<u>お</u>	<u>22</u>	<u>ほ</u>	<u>63</u>
<u>か</u>	<u>25</u>	<u>ま</u>	<u>63</u>
<u>き</u>	<u>26</u>	<u>み</u>	<u>64</u>
<u>く</u>	<u>27</u>	<u>む</u>	<u>65</u>
<u>け</u>	<u>34</u>	<u>め</u>	<u>-</u>
<u>こ</u>	<u>34</u>	<u>も</u>	<u>65</u>
<u>さ</u>	<u>38</u>	<u>や</u>	<u>66</u>
<u>し</u>	<u>40</u>	<u>ゆ</u>	<u>69</u>
<u>す</u>	<u>43</u>	<u>よ</u>	<u>70</u>
<u>せ</u>	<u>46</u>	<u>ら</u>	<u>-</u>
<u>そ</u>	<u>47</u>	<u>り</u>	<u>71</u>
<u>た</u>	<u>47</u>	<u>る</u>	<u>-</u>
<u>ち</u>	<u>51</u>	<u>れ</u>	<u>72</u>
<u>つ</u>	<u>52</u>	<u>ろ</u>	<u>72</u>
<u>て</u>	<u>52</u>	<u>わ</u>	<u>-</u>
<u>と</u>	<u>53</u>		
<u>な</u>	<u>54</u>	<u>凡例</u>	<u>4</u>
<u>に</u>	<u>55</u>	<u>参考資料</u>	<u>74</u>
<u>ぬ</u>	<u>56</u>	<u>奥付</u>	<u>74</u>
<u>ね</u>	<u>56</u>		
<u>の</u>	<u>57</u>		

あ

あかへるらーめん【赤ヘルラーメン】

墓参りの同行を渋る柚子に与えられそうになった外食の代替。カップラーメン。辛そう。実在、元ネタは確認されていない。

あさしも【朝霜】

日本海軍の駆逐艦。夕雲型駆逐艦 16 番艦。1943 年 1 月 21 日起工、1943 年 7 月 18 日進水、1943 年 11 月 27 日竣工。1945 年天一号作戦に参加するものの、機関故障を起こし艦隊から落伍する。正午過ぎに敵機と交戦中と無電を発信したのち、連絡が途絶した。

あしかがたかうじ【足利尊氏】

歴史上の足利尊氏

嘉元 3 年 (1305 年) - 正平 13 年/延文 3 年 4 月 30 日 (1358 年 6 月 7 日)

河内源氏であり、正式には源尊氏。

室町幕府初代征夷大将軍。当初は元服の際時の鎌倉幕府執権北条高時より一字拝領して足利高氏と称したが、鎌倉幕府倒幕の際の功績により、後醍醐天皇の名尊治より一字拝領して尊氏を称するようになる。

元々は幕府の御家人であるが、後醍醐天皇に同調し倒幕に協力する。建武の新政が始まると自らは建武政権とは距離を置いた。後に鎌倉で旧幕府残党が蜂起すると、後醍醐天皇の命令を無視し駆けつけ、尊氏がコントロール不能になることを恐れた後醍醐天皇から征夷大将軍を任官したのち、幕府残党を討伐し独立する。その時は新田義貞と北畠顕家に挟み討ちに遭い敗北して九州へ敗走するも、九州で勢力を盛り返し、湊川で圧倒的小勢の楠木正成を討ち入京する。後醍醐天皇の顔を立て和睦するが、後醍醐天皇は吉野へ脱出し南朝を開く。

この後は弟直義と対立したり、息子の直冬と対立したり、南朝を懐柔してみたり、ほとんど内輪揉めと呼べるような戦いを繰り返しているうちに正平 13 年/延文 3 年 (1358 年)、京都二条万里小路邸で病死する。享年 54。尊氏は持明院統、北朝に与し、後醍醐天皇を吉野へ追いやったことにより、南朝を正統とする水戸学が発展する江戸時代末期よりは逆賊と呼ばれるようになるが、政治上対立はし

たものの、個人的な部分では後醍醐天皇との相性は悪くなかったとする説もあり、その証左として後醍醐天皇の慰霊の為、天龍寺の造営などを行っていることが挙げられる。ただしここでは注意が必要で、日本には古来より崇りを恐れた場合は対象が敵であったとしても特に手厚く葬るという習俗がある。

作中の足利尊氏

史実の足利尊氏と同様、後醍醐天皇の倒幕に加わり、後に叛旗を翻すが、楠木正成・新田義貞軍に敗北。この際に楠木正成が擁する細作の働きにより正成軍に捕捉されるが、正成は「純粹すぎる後醍醐天皇に政務は任せられない、人が生きるためには鬼も神も欺かねばならない」という尊氏の言葉を聞き、民に必要な英傑であるとして、これを見逃す。

この時雑誌掲載版では尊氏は左目を失っており、天津彦根神を眼窩に宿していた。尊氏は後醍醐天皇＝素戔鳴尊の理想に殉じたいとする正成を「討たねばならぬ」と言っており、素戔鳴尊と天津彦根神の対立は既にこの時代にはあったものと思われる。ただし、単行本では尊氏の左目は健在であり周囲に天津彦根神の気配はない。尊氏は源氏であり源氏は元をたどると天皇家に繋がるため、その血筋が審神者であると整合が取れないためか。

その後、尊氏は九州で勢力を盛り返し、上洛の途中、湊川で楠木正成軍を破る。正成・正季が素戔鳴尊に従い、乱裁道宗の名、蘇民将来の印を受け不死の存在となったことを知ると、荒神に魅入られた者のなれの果てはこうであると、戒めとして両名を梟首（きゅうしゅ：さらし首）とした。

あしなづち【脚摩乳】

足名椎、足摩槌（読みは同じ）とも。大山祇神の子。妻は父を同じくする手摩乳で、娘は奇稲田姫を含め 8 人いたが、毎年現れる八岐大蛇のために 7 人まで食い殺され、とうとう奇稲田姫の番となりそうであったところ、素戔鳴尊が訪れる。素戔鳴尊に奇稲田姫を差し出すことを条件に八岐大蛇退治を依頼し、その準備の手伝いをする。

素戔鳴尊が八岐大蛇を退治した後は須賀の地に宮殿が建てられ、その宮の首長に任じられた。同時に「稲田宮主神」の名を与えられて

と同じ意味。

『記紀』双方に記述があり、素戔鳴尊が高天原で犯した罪とされる。すべて農耕を妨害する行為である。その内容は以下の通り。

畔放（あはなち）：田に張っている水を、畔を壊すことで流出させることで水田耕作の妨害をすること。『記紀』で素戔鳴尊が高天原の、天照大神の田に対してこれを行ったとされる。
溝埋（みぞうめ）：田に水を引くために設けた溝を埋め、水を引けなくする。灌漑の妨害。

『記紀』に記述がある。

樋放（ひはなち）：田に水を引くために設けた管（樋）を壊すことで水を引けなくする。灌漑の妨害で、『日本書紀』にのみ記述がある。

頻播（しきまき）：他の人が種を蒔いた所に重ねて種を蒔いて作物の生長を妨げること。また一説には後から種を蒔く事でそのエリアの耕作権を奪うこと。『日本書紀』に記述がある。
串刺（くしさし）：『日本書紀』では、素戔鳴尊が高天原において天照大神の田を妬んでこれを行ったと記されている。その目的は収穫時に他人の田畑に自分の土地であることを示す杭を立てて横領すること。または一説には他人の田畑に呪いを込めた串を刺すことでその所有者に害を及ぼすこと。あるいはその呪いで近寄れないようにした上で横領すること。もしくは田の中に多くの串を埋めて隠し、所有者が田に入った際足を傷つけること。その他には家畜に串を刺して殺すこと、と様々な説がある。

生剥（いきはぎ）：馬の皮を生きながら剥ぐこととされ、『日本書紀』に素戔鳴尊が天照大神が神に献上する服を織っている殿内に天斑駒（あまのふちこま）を生剥にして投げ入れたとその起源を記していることから、神事またはその準備の神聖性を冒すものとされる。本来は単に家畜の皮を剥いで殺傷することであったとの説もある。

逆剥（さかはぎ）：馬の皮を尻の方から剥ぐこと。『記紀』では生剥と同じ起源を記していることから、これも神事の神聖性を冒すものとされる。生剥と同じく本来は単に家畜の皮を剥いで殺傷することであったとの説もある。
第十三話三では、平田篤瀧の馬に対して素戔鳴尊が「逆剥ぎにしてくれようか！」とコメ

ントしている。

尿戸（くそへ）：『記紀』には素戔鳴尊が高天原において天照大神が大嘗祭または新嘗祭行なう神殿に脱糞したのが起源であると記されている。そのためこれも神事に際して祭場を糞などの汚物で汚すこととされる。一説には「くそと」と読み、「と」は祝詞（のりと）の「と」と同じく呪的行為を指すとして、本来は肥料としての糞尿に呪いをかけて作物に害を与える行為であるともいわれる。

第三十二話三では結実と御幸が、天つ罪は素戔鳴尊の行為であることから、素戔鳴尊のことをこう呼んでいる。

あまつひこねのかみ【天津彦根神】

一般にいう天津彦根神

天津日子根命（あまつひこねのみこと）とも。
天照大神と素戔鳴尊の誓約（うけい）の際に、天照大神の八咫勾玉の五百箇の御統の珠から生まれた五柱の男神のうちの一柱である。『古事記』『日本書紀』では3番目に生まれ、天照大神の持ち物から生まれたので天照大神の子であるとされた。記紀においての天津彦根神の記述はここまでで、その後登場しない。
天津彦根神は龍の姿をした神で、龍神であるとされる。そして、雨乞いの神として有名である。また、海の神でもあるとされ、山の神でもあるとされ、土地の神でもあり、農業や漁業の神でもある。そして信仰の分布も近畿から関東までと広い。あまりにその像がぶれており、付与された属性が多様多様にすぎる神である。このため、天津彦根神は各地で信仰されていた神を一つにあわせて作られた神と考えられている。大和朝廷が各地の氏族を従えるために当地の神を天照大神の子であるとしたわけである。

また、天津彦根神はさらに鍛冶の神であるともされる。これは天津彦根神を祀る多度大社と共に立てられている一目連神社の祭神の影響である。一目連神とは天津彦根神の子供、天目一箇神（あめのまひとつのかみ）の別称であり、天目一箇神は山の神でなおかつ鍛冶の神でもある。この神を子に持ち、共に祀られているために天津彦根神も鍛冶の神として祀られているのである。

ところで、多度大社の側の多度山には、昔、

話の中に見られる。

あめのうずめのみこと【天鈿女命】

天宇受賣命とも。

鈿とはかんざしを表す漢字である。髪飾りを付けて神祭祀をする女神、神憑った女性の人格化とされる。俳優、芸能、巫女の神。

古事記の記述によると、天照大神が天岩戸に籠もってしまった際、その前で衣装を乱し胸や陰部を露出し、八百万の神の笑いを誘った。この笑い声が気になり天照大神は天岩戸を開くことになる。

天孫降臨の際は瓊瓊杵尊に付き添って天下った。その道中、猿田彦神と遭遇、その怪異な容貌に他の神が恐れをなし尻込みしている際、瓊瓊杵尊に「手弱女人にあれども、いむかふ神と面勝つ神（か弱い女ではあるが、敵対する神と相対してもにらみあって勝つことができる神）」であると言われ、猿田彦神に対応することとなった。そこで天鈿女命は胸をはだけ、笑いながら名を尋ねた。そこで猿田彦神は名乗りを上げ、天津神の先導のため待っていたと伝えたので、天鈿女命は共に瓊瓊杵尊を先導した。その後先導の役目を終えた猿田彦神を鎮座地の伊勢まで送っていき、結婚する。それ以降、猿女と名乗る。

「稗田の女」は「猿女氏ゆかり」なので、天鈿女命は柚子らの祖神ということになる。

あめのたぢからお【天手力男】

天手力雄神とも。天照大神が天岩戸に隠れた際は、岩戸の脇に待機していて、天照大神が顔を覗かせた時に怪力で天照大神を引きずり出した。これにより世界に明るさが戻った。天孫降臨の際は瓊瓊杵尊に付き従い天降った。名前は「天の、手の力が強い男の神」という意味であり、筋力や怪力の神である。

あめのぬぼこ【天沼矛】

天之瓊矛、天瓊戈とも。

沼矛とは古代に存在した、槍のような長柄の武器。

伊弉諾尊と伊弉冉尊が国生みを行う際、天と地がまだしっかりと定まっていなかったため、天沼矛を海に突き立て、かき混ぜた。これを引き上げたところ穂先から滴り落ちた塩が固まり、於能基呂島（おのごろじま）となった。両神はその島に降りて国生みを行っ

た。

これを踏まえると、作中の乱裁道宗のセリフ「もう一度沼矛を地に突き立てる」とは、もう一度国づくりを行い、自分らの思う通りの世を作り出す、という意味と考えられる。

作中の天沼矛は高千穂峰山頂に刺さっている青銅製の「天逆鉾（あめのさかぼこ）」と意匠がよく似ている。作中の天沼矛は日瑠子陛下の側近斎藤の顔に似た意匠が施されているが、斎藤似ではないものの実際の天逆鉾にも人面の意匠が施されている。

天逆鉾は天沼矛の別名とされるが、中世以降仏教の影響を受け位置付けが天沼矛と異なっていく。

作中の天沼矛は世界を新たに作り出す力があるというよりも、その力を持つ織機である高天原を起動するためのスイッチであるかのような描写がなされていた。

あめのむらくものつぎ【天叢雲剣】

→草薙剣

あやたちみちむね【乱裁道宗】

昭和霊異記Ⅲで登場した乱裁道宗が「鬼 天狗 傀儡師 忍び 山人…」「我らを号す異名は古来より幾つもあった」「不順国神（まつろわぬくにつかみ）の末裔だ」「我が祖神猿田彦」と発言しているように、作中の乱裁道宗は様々な関連し合う要素の重ね合わせから成り立っている。大きく分けて三つの人物の要素があるように思われる。

- 1.山人の長、乱裁道宗
- 2.修験道の開祖、役小角
- 3.河内の悪党、楠木正成

以下、この項では山人の長、乱裁道宗について取り扱う。役小角や楠木正成の項も合わせて参照されたい。

山人の長としての乱裁道宗

乱裁道宗という名は全くの創作によるものではなく、サンカという山人集団の指導者に代々受け継がれる名とされるもので、作中と同じく個人に固有の名ではない。文献によって乱破道宗とも記述される。

乱裁道宗は撰閑家の藤原道隆の末裔とする説が存在する。

道隆は傀儡女に子供を産ませ道宗と名付けたが、相手の女の身分が低いために隠し子とし

が逃げ出すと、伊弉冉尊は「見てはならないと言ったのに、よくも恥をかかせてくれた」と言い、伊弉諾尊を追いかけ、黄泉醜女や八雷神をけしかけた。伊弉諾尊は髪飾りから生まれた葡萄、櫛から生まれた筍、黄泉の境に生えていた桃の木の実を次々と投げつけ、黄泉国とこの世の境界である黄泉比良坂まで逃げることに成功する。

伊弉諾尊は黄泉比良坂に千曳岩を置いて黄泉国への道を塞ぎ、千曳岩越しに会話して伊弉冉尊と離縁する。この時日本書紀の一書には菊理媛神が両者の間を取り持ったと読める表現がある。

黄泉国から戻った伊弉諾尊は穢れを落とすために禊を行った。この際速佐須良比賣など様々な神が生まれ、最後に天照大神、月讀尊（つくよみのみこと）、素戔鳴尊が生まれている。伊弉諾尊は天照大神に高天原、月讀尊に夜の世界、素戔鳴尊に海原の統治を委任した。しかし素戔鳴尊は「妣国根之堅州国」へ行きたいと言って泣き止まないため、伊弉諾尊は素戔鳴尊を追放することとし、自らは淡海（近江）または淡道（淡路島）の多賀に籠もったとされる。この後素戔鳴尊は追放される前に天照大神に挨拶しようと思い高天原へ向かうが、天照大神に謀反を疑われることとなる。

いざなみのみこと【伊弉冉尊】

伊邪那美命とも。

→伊弉諾尊

伊弉諾尊と離縁した後、伊弉冉尊は黄泉国に残り、その主宰神となる。以降は黄泉津大神（よまつおおみかみ）、道敷大神（ちしきのおおかみ）とも呼ばれる。

さて、その後素戔鳴尊が「妣国根之堅州国」に帰りたいと言うが、この時妣を伊弉冉尊とみなすと「妣国根之堅州国」は黄泉国ということとなるが、しかしよく考えてみると素戔鳴尊生誕に伊弉冉尊はほとんど関与していない。もちろん父が伊弉諾尊であるならば母はその妻伊弉冉尊である、とするならば何の問題もないが、母が伊弉冉尊でないとするならば「妣国根之堅州国」は黄泉国ではないことになる。その場合の解釈は祖先の国である根の堅州国、ということになる。日本書紀一書第4にはまず新羅の曾尸茂梨（そしもり）に

天降ってから出雲の鳥上峯に來たと記述があるので、この場合「妣国根之堅州国」は新羅である可能性もある。もともと、作中において、妣とは明確に伊弉冉尊のことであるので、この話は無関係である。

作中では素戔鳴尊が求めてやまない母親だが、死者であるため伊弉冉尊は黄泉国にいる。黄泉国との境である千曳岩がある限り会うことができないため、これを審神者に破壊させるため様々な騒動を引き起こした。言わばすべての原因。

死を司る黄泉国の主宰神だけあり、千曳岩が完全に破壊されてはいない状態でも現世に重大な影響を及ぼした。靈崩壊は伊弉冉尊が現世に伊弉冉尊が現れそうになったために起こった。伊弉冉尊が発する炎に触れると人も妖怪も自らの姿を保てなくなってしまう。

作中では一貫して人の姿ではなく竈として描かれた。これは伊弉冉尊が黄泉国から帰れなくなった原因、「黄泉竈食い（よもつへぐい）」からのイメージと思われる。黄泉竈食いとは黄泉の国の竈で煮炊きされたものを食べることに。これにより死者は完全に黄泉国の者となりきってしまうと言われている。仲間となることを「同じ釜の飯を食う」と言うが、そのようなイメージと考えるとわかりやすい。

作中では海外、諸外国に関する描写が全くないが、アワーズ掲載時にはその原因が描かれていた。日本以外の世界は靈崩壊の際伊弉冉尊の影響により存在しなくなっている。これを伊弉冉の噛み跡と呼ぶ。日本国内の、諸外国について触れた資料は靈崩壊後意味をなさない記号に置換されてしまっている。いわゆる文字化け状態である。ところが、これらの海外に関する描写は単行本化の際に一切収録されることはなかった。

いしゅう【蛸集】

蛸とははりねずみのこと。はりねずみの毛のように、多くの物が寄り集まること。

いちれいしこん【一靈四魂】

人間や神の靈魂は一靈と四魂という要素から成り立っているとする説。

一靈は四魂を統括するもの。直靈（なおひ）、あるいは曲靈（まがつひ）のこと。

→四魂

いのうじんじゃ【稲生神社】

柚子ら稗田家が住み稗田御幸が宮司を務める神社。現在は宮司代理の倉子を取り仕切っていると思われる。祭神は不明。

同じ文字で表されるの神社は実在する。ただし、読みは「いなりじんじゃ」であり、祭神は稲生物怪録の主人公稲生武太夫である。所在は広島市であり、関連するのは名前のみと見てよい。

作中の稲生神社は同じく三次に実在する太歳神社、熊野神社がモデルになっていると思われる。鳥居や階段が太歳神社に、境内の様子が熊野神社に非常に似ている。

ちなみに、太歳神社では「巫女三姉妹のお守り」を入手することができる。

アニメ版第一話の稲生神社境内からの景色は実際の太歳神社拝殿からの景色を参考しているようで、非常に似ている。



太歳神社

いのうもののけろく【稲生物怪録】

広島県三次市に伝わる妖怪譚。採録者により数種類のバージョンが存在する。

江戸時代に現実にあった話とされ、話の中で平太郎が魔王より譲り渡されたとされる小槌も三次市の國前寺に現存する。

朝霧の巫女に登場する怪異はこの本の怪異が元になっているものが多い。

あらすじ

稲生平太郎という武家の少年が、権八という元力士が武家を侮辱する発言をしたことをきっかけに、どちらが豪胆であるかを決めるため、肝試しを行うこととなった。

肝試しとは触れると即死してしまうほどのたたりがあるとされ、指をさしただけでも悪心

が起こり吐血するという曰く付きの比熊山の石塚にしるしをつけるというもの。

平太郎は嵐の晩にこれをやったのけるが、権八はさらにその石塚の前で百物語をしようと言う。百物語とは晩に百の灯心に火をともし、一つ怪談を行うごとに火を一つずつ消していくというもの。当時はこれが流行しており、百物語が終わる時には必ず怪異が現れるとされていた。

平太郎はこの挑戦を受け、実際に石塚の前で権八と共に百物語を行った。その時には何事も起こらなかったものの、その2ヵ月後から30日間、怪異の襲来を受けるようになった。その原因は百物語であるとするバージョンと、石塚にしるしをつけたためとするバージョンがある。

いずれにしても、平太郎は連日の怪異の襲来にも動じなかったため、ついには怪異を統べる妖怪があらわれ降参し、その勇気を称えて魔除けとして一つの本槌を譲り渡す。

稲生物怪録⇄朝霧の巫女 妖怪対応一覧

稲生物怪録には複数のバージョンが存在するが、以下の記述は『稲生物怪録絵巻』（堀田家本）に準ずる。

第四話一

巨大な一つ目の男：一日目

平太郎が寝ていると、側の障子が火が付いたように明るくなったので驚いて障子を開けようとしたが、開かない。障子を跳ね除けて外へ出ると、目から赤い光を放つ一つ目の大男が平太郎を一握りに掴んだ。離れようとして揉み合う内によく離されたので、刀を取って立ち向かおうとすると、その間に化物は居間の床の下へ入ってしまった。

第四話二

柚子に遭遇した一つ目の赤子：一日目

上記と同時刻に権八の家にはやはり目から光を放つ一つ目の赤子が現れた。隣の平太郎宅が騒がしかったが、権八は恐ろしくて、動くこともできなかった。その内に赤子も消え、隣の騒動も収まった。

第六話二

水道の水が凍り付く：四日目

稲生物怪録の舞台は夏だが、夜に瓶の水が凍った。

対し決別の意志を固め、忠明が与えた縛りを解くことにより滅んだ。

アニメ版での声優は堀江由衣。

ころう【固陋】

古い習慣や考え、前例に固執して、新しいものを好まないこと。

こんぱく【魂魄】

靈魂、たましいのこと。魂魄の魂は陽で、精神をつかさどる靈魂のこと。魄は陰で、肉体をつかさどる靈魂のことであり、靈魂は二重構造になっていると考えられていた。

さ

さいとう【斉藤】

日瑠子の側近。日瑠子が唯一弱音を吐けるほど心を許している存在。先帝の代以前より仕えている模様で、昭和の靈崩壊の際にも警視庁抜刀隊を率いて顔を見せる。

剣、十手、札を使いこなし、戦闘能力は非常に高い。柚子が素戔鳴尊にさらわれる際に駆けつけた際は新撰組を彷彿とさせるだんだら模様の羽織を着用していた。斉藤の名前は明らかにされなかったため、新撰組幹部斎藤との関係は不明。

物語終盤では戦地に赴く日瑠子の側に常にある、お舟入りを行うと決めた後も日瑠子の葦舟たる大和に大樹のように同化して最後まで日瑠子に付き従った。

さかはぎ【逆剥ぎ】

動物の皮を尾の側から剥ぐこと。古代日本においては禁忌で、天津罪のひとつとして数えられる。

素戔鳴尊が逆剥ぎにした馬を機織小屋に投げ込んだことが天照大神の天岩戸竈もりの原因となっている。

さきばらいずみ【岬原いずみ】

巫女委員会のひとり。

妖怪を超自然現象ととらえ、オカルト的興味で巫女委員会に志望したムー愛読者。やや特殊な種類の文筆活動を行っている模様。

妖怪や黄泉軍と戦う際には札や神楽鈴を用い、主に防御を担当していたようである。

アニメ版

声優は神田理江。アニメ版においてはポケッタコンピュータ的なものを持ち歩き、Web

サイト「ヤモリビト之墓」を開設していたりとITに強い側面を見せた。なお「ヤモリビト之墓」は実際のインターネット上に制作されたページを作中に使用したものであり、実在した(<http://yamoribito.at.infoseek.co.jp/>)が、アニメ版放映終了とほぼ同時に閉鎖された。以降2010年までは跡地としてトップページのみが残されていたが、infoseekを買収した楽天が無料Webサイトのサービスを終了したため、現在は何も残っていない。ヤモリビトおよび、菊里がこのサイトに書き込む際に使用したハンドル「貧太」は水木しげる『悪魔くん』の登場人物である。

妖怪や黄泉軍と戦う際には本人曰く「シャーマニックカード」、つまりはお札を用いる。この札は表面に書かれているものからアニメ版の柚子が使用しているもの同様、陰陽道由来のものと思われる。

これを複数前面に展開して敵の攻撃を防御する場面が多かった。必殺技は多数の札を相手にまとりわりつかせ締め上げる「タキオンプラズマ返し」。後に「タキオンプラズマ逆の字殺し」にパワーアップする。

さすらひめ【流浪姫】

速佐須良比賣のことをさしていると思われる。

「流浪姫」の表記でサスラヒメのことを扱っている書物は『ホツマツタエ』のみだが、『ホツマツタエ』は後世の偽書とする説が有力であり、取り扱いには注意が必要である。

『ホツマツタエ』内の流浪姫の記述は一般の速佐須良比賣に関する伝承と異なっており、禊・祓ともまったく関係がない。天照大神と思われるアマテル神（男神）の後、ハヤコ、モチコが遠流にされウサ宮へ下った後、そこでの暮らしが宮中のものとあまりに違ったため出奔し、ヒカワ（出雲）へ向かい流浪姫になったという。なお、遠流にされた原因は素戔鳴尊と思われる人物、ソサノオとの密通のためである。

→速佐須良比賣

さにわ【審神者】

神降ろしの際、神主に降りた存在が、実際に自分達が降ろそうとした神であるのかどうか、真偽を見定める係。神の名前を騙る靈の類も存在するので、必要となる。姿の見えないも

のを見定めなければならないため、高度な技術、経験が必要となり、神主よりも重要な役目とされる。そのはじめは武内宿禰という人物であるという。

作中の審神者は「境界を渡り神と人の仲介を行う力をもつ異人」であるという。境界を渡る力を持つため現世と黄泉国の境界、千曳岩を動かす力も持っているという。

さるめ【猿女】

天鈿女命のこと。

猿田彦神と結婚してから、その名の猿を冠してこう呼ばれる。

第一話一、「猿女氏ゆかりの～」とは、稗田氏が天鈿女命の末裔だということを指している。しかし、こう言う乱裁道宗も天鈿女神と結婚した猿田彦神の末裔と発言したことがあり、非常に近い関係であるとも考えられるのだが。

さんかもじ【サンカ文字】

山人の一種といえるサンカが用いていたとされる文字。第四話で登場した大男、柚子に金縛りを掛けた一つ目の小男、第八話三で柚子に取り憑いたガマの発言の吹き出しの中の文字がサンカ文字である。

さんこしょ【三鈷杵】

第十三話四で菊理（素戔鳴尊）が平田の銃剣による攻撃を受け止めた物。

密教の法具、金剛杵（こんごうしよ）の一種。元々はインドの武器である。これの爪状の部分を鈷（こ）といい、鉞（もり）から変化したものといわれる。悟りを妨げるものを討ち払う意味を持っている。

三鈷杵はこの鈷の部分で 3 つだが、1 つ、5 つの物もあり、それぞれ独鈷杵（とっこしよ）、五鈷杵（ごこしよ）という。

独鈷杵の 1 つの爪が左右対称になっているのはこれを持つ者と仏が一体となることを表し、三鈷杵の場合はこれを持つ者の三業と仏の三密が通じること表し、五鈷杵の場合はこれを持つ者の五智と仏の五智も本来は一体であることを表すという。

何故菊理がこれを持っていたかと言うと、菊理（の中の存在）と関連が深い南朝の後醍醐天皇が、密教と深く繋がりを持っていたからであると思われる。

さんしゅのじんぎ【三種の神器】

三種宝物とも。

八咫鏡、草薙剣（天叢雲剣）、八坂瓊曲玉の三種から成る皇位の象徴。

さんじょ【散所】

貴族や社寺の荘園、所領の一形態。あるいはその住民。

領主の元で労役に就くが、年貢を免除される。その代わりとして、手工業や狩猟などの労役を課せられた。年貢に耐えられず田畑を捨てた流民の流入が多く、このため散所の住民は賤民視されるようになる。

また、住民からは人形回しなどの芸を生業とする者が多く生み出されたともいわれる。手工業、狩猟、芸能、すべて山人に通じるキーワードである。

さんじん【山人】

山を生活の場とし、耕作を行わずに漂泊する民の総称。

柳田國男は、彼らは土地を持って国家に帰順するいわゆる「常民」と、山人は別の民族ではないかと考えている。

つまり、大和朝廷の民族以前に住み着いていた民、先住民であり、その先住民が大和朝廷に従わず、追われ、大和朝廷の文化である耕作を拒否して山の中に移り住んだのが山人ではないか、と考えたのである。

この構図は記紀神話の天津神（＝大和朝廷）、国津神（＝先住民）と対応している。

昭和霊異記Ⅲでも、乱裁道宗が「鬼 天狗 傀儡師 忍び 山人…」我らを号す異名は古来より幾つもあった」「不順国神（まつろわぬくにつかみ）の末裔だ」と、言っている。

ここで乱裁道宗に挙げられた異名には全て山人の要素があるといえる。また山人と関係する要素として他に山伏、タタラ場などがある。これらを考え合わせるとつまり、山人とは山に棲む特殊な技術を持った人たちと解釈することもできる。製鉄などは力の象徴でもあり、畏怖の対象となってもおかしくない。

それに彼らの生活の場である山の不気味さ、神秘性などのイメージも合わさって、天狗や鬼というものを想起させたと思われる。

このため、乱裁道宗は天狗面を掛けるのである。

さんどく【三毒】

黄昏の 黄昏の 物忌みしよか 毬つこか
黄泉荒神 羽根ついた
黄泉のほとりで 羽根ついた
ヤガレナ様に 巫女遣ろう
お命伝える 巫女遣ろう
毬がないとて 毬つけぬ
なんの 遊びにやこまりやせぬ
羽根と羽子板あるじゃもの

黄昏の 黄昏の 物忌みしよか 毬つこか
黄泉荒神 寂しゅうて
黄泉のほとりで 寂しゅうて
ヤガレナ様に 巫女遣ろう
お命伝える 巫女遣ろう
一夜千年 風吹いて
一夜万年 死に絶えて
後に残るは 霧ばかり

黄泉荒神、よもつあらかみの「つ」は現代語の「の」に同じ。つまり黄泉国の荒ぶる神の意。お命は「御御言」か。天皇、神の言葉の意。千引岩は千曳岩のこと。
よもついくさとは本来は黄泉国の軍勢、兵のこと。しかし、～に消えましょう、では意味が通らない。ここでは黄泉国による戦争、いくさ（黄泉戦）という独自の解釈が行われている。

朝霧の巫女 DVD 四巻のブックレットによると魃鬼とは小鬼のことで、黄昏の勢力の兵隊であるとのこと。

蟲物はまじないをして相手を呪うこと。またはその呪いの術のこと。もしくは、その呪いに使う物品。あるいは人間を惑わすもの、魔物の類。

たたらば【タタラ場】

タタラ（踏鞴）とは製鉄を行う炉に空気を送るために、備え付けられた大きなふいごで、足で踏むことによって炉に空気を送り込む。また、製鉄にタタラが欠かせなかったことから、タタラを使う炉のこともタタラ（鑪）と呼ぶようになった。

つまりタタラ場とは製鉄所のことである。製鉄所であるため、タタラ場は原料の鉄の鉱脈がある山中にあるのが普通であり、山中の

技術集団、ということで山人とリンクする。

たたりいわ【祟り岩】

稲生物怪録に登場する。比熊山に存在し、一度触れただけで即死し、指差しただけでも吐血して死んでしまうというほどの妖力を持つ。主人公の平太郎が肝試しとして夜に印としてこの岩に縄を置いて来たことが原因で、30日の間妖怪の襲撃に晒されることになる。

第一話で乱裁道宗がこれに乗って登場した。

たぢから【手力】

本来の意味は腕力のこと。

作中のタヂカラについては、第十九話において素戔鳴尊が「アマテラスを探し見て 天岩戸を動かした天手力男が居るように イザナミを探し見て黄泉の岩戸を動かせる"タヂカラ"を持つ者がいる」「境界を渡り 天津神の名を探り見て手引く力 すなわちそれが審神者の力だ」と説明している。注意が必要なのは天手力男が天照大神を引きずり出す時はその所在は天岩戸の中と確定しており明らかであったため、「探し見て」はいないところである。

「神の名を探り見る」のは審神者の力なので、この素戔鳴尊による"タヂカラ"の解釈には審神者の能力が加味されているようである。一方、第二十話で天津彦根神が言っている手力は単純に武力、腕力のことようである。このあたりの解釈の違いには第十九話が単行本発行の際に後から書き下ろされたことも関係がある可能性がある。

たっぷくん【タップくん】

1975年から1994年まで教育テレビで放送された、算数の教育番組「いちにのさんすう」に登場するキャラクター。

魔法が使える白いお化けである。

「タップラトヘン!」の掛け声と共に煙がもくもく出て登場する。2006年にハンドパペットが販売され、昔の小学生を懐かしがらせた。ウガワさんの自画像の元となったキャラクターである。第十九話ではその自画像が解説を務めようとした。名前はJ A Pくんというらしい。

たまふり【魂振り】

魂に活力を与え再生させる呪術。また、その呪術を行うこと。具体的な方法は、神体や神輿を大いに揺さぶること。活力を失った靈魂

まったくない。

はにぶね【埴船】

土で作られた船。

『出雲国風土記抄』に素戔鳴尊が新羅へ天降った後、これに乗って日本に帰国したとする伝承がある。

「須佐之男命、志羅伎国より五十猛命を帥いて東せし埴船此の山に止る。故に俗に船通山という」

作中の船通山はこの船そのものであるようだ。

はは【妣】

この字を「はは」と読む例として有名なのは、古事記において素戔鳴尊が

「僕は妣国根堅州国に罷らむと欲ふ」(僕は母の国である根堅州国に行きたい)

と発言する場面である。

素戔鳴尊の父親は記紀ともに伊弉諾尊であるため、母はその妻伊弉冉尊であると考えられる。この時伊弉冉尊はすでに黄泉津大神として黄泉国にいることに加え、黄泉国も根堅州国も入口は同じく黄泉比良坂であるため、一般に根堅州国は黄泉国と同一視される。

ただし、日本書紀では素戔鳴尊は伊弉冉尊から生まれているが、古事記の記述によると素戔鳴尊は伊弉冉尊から生まれたわけではなく、伊弉諾尊が禊を行った時に生まれているために、上記の説を否定し、例えば、「妣国」を自分の先祖の国、出身国、母国とする説なども存在する。この場合、根堅州国は黄泉国と入口である黄泉比良坂を共有する別の土地であることになる。

はまかぜ【浜風】

日本海軍の駆逐艦。陽炎型駆逐艦 13 番艦。1939 年 11 月 20 日起工、1940 年 11 月 25 日進水、1941 年 6 月 30 日竣工、呉鎮守府籍。「武蔵」「金剛」「信濃」それぞれの沈没の際同じ戦場におり、1945 年天一号作戦に参加し、坊ノ岬沖海戦で「大和」と共に轟沈。

はまじみずほ【浜路瑞穂】

アニメ版のみに登場。黄昏の巫女のひとり。羽子板の付喪神。羽子板の付喪神なので、自分たちを使って遊んでくれた年頃の子供たちと遊ぶことに喜びを覚えていたが、妖怪であるためしばしば疎外され、ある時は修験者に退治されそうになった。その際、乱裁道宗に

救われ、恩義に感じて協力するようになる。魍魎腕(すだまのかいな)というエネルギーのようなものを前方へ放つ術を使う。どちらかというと肉体派であり、力石征子とライバルであるように描写された。菊里を利用する立場にあったが、それを申し訳なく、また菊里を妹のように思っていた。不死の存在であることを呪い、自らの死を望んでいた乱裁道宗がヤガレナ神の命に背き、永劫に不死となる呪いを受けた際、浦波雪絵とともに自らの命と引き替えに乱裁道宗への不死の呪いを解いた。

はやさすらひめ【速佐須良比賣】

速佐須良比咩(読みは同じ)とも。

祓戸四神の一柱。

祓戸四神とは、伊弉冉尊を連れ戻すために黄泉国へ向かった伊弉諾尊が黄泉国の穢れを落とすため禊をした際に、天照大神などとともに生まれた神で、祓を行う場所である祓戸に祭られる神。祓を司る四柱の神のことである。祓の際使用される祝詞、大祓詞によれば、速佐須良比賣は根の国底の国におわし、他の祓戸四神が根の国に送り込んだ罪穢れを背負い、あてどなくさすらうことにより消滅させるという。

祓戸四神の中でも祓の最終段階を受け持ち、実際に罪穢れを消滅させる神である。その神が背負って流浪することにより罪穢れを消滅させるということは、つまるところ神道における祓とは何かに穢れを押し付け、流し雛のように流し去る、または追放するということであると言える。

本居宣長は音の類似、在地の同一より大国主神の娘、須勢理比賣(すせりひめ)と同一神であるとする説を唱えている。また根の国との関連から根の堅洲国にいる素戔鳴尊と同じ神ではないかとする説まで存在する。

はらえことば【祓詞】

神事を行う前、神前に上がる前に罪、穢れを祓う修祓(しゅばつ)の際に唱える祝詞。第十一話四で巫女委員会が乱裁道宗の結界を突破する際に唱えていた。

ばんきんさい【万機親裁】

君主が自らすべての裁決を下すこと。後醍醐天皇はこれを目指したが、手が回らなかった

国家元首である明治天皇が滞在し、広島における皇居としての役割も果たした。これに伴い、臨時帝国議会も広島で開催された。明治維新後、首都機能が東京から移転した唯一の例となる。太平洋戦争末期に松代地下への移転も検討されたが、施設が完成する前に終戦を迎え、計画は実行されなかった。作中では出雲国(島根県)が戦場となるため、日清戦争時同様に、より戦場に近い広島に本拠点を定めたものと思われる。

ひるこ【水蛭子】

古事記では伊弉諾尊と伊弉冉尊が国産みの際、伊弉冉尊から声をかけるという間違った作法で行ってしまったため、淡島(淡路島ではない)と共に生まれた未熟児。蛭のように手足が萎えていたという。葦舟に乗せて海へ流された。

日本書紀では伊弉諾尊と伊弉冉尊が日神、月神を生んだ際、次に生まれた神。しかし3歳になっても手足が立たなかったためにやはり船で流された。

この海へ流された＝海からやってくるというイメージから、海神エビスと同一視されることもある。

人類の始祖となる男女二柱の神の最初の子が生み損ないとなる神話は世界各地で見られる。

ひるこ【日瑠子】

作中の今上天皇。15歳。伊弉冉尊の影響により滅ぼようとしている世界を守るため、自己犠牲をも厭わない強い意志を持っていたが、同じように自らを犠牲にした先帝である母を慕うなど、年相応の脆さも持っていた。

名前のヒルコは水蛭子を連想させるが、天照大神の別名「大日女尊(おおひるめのみこと)」のひるめが日る女＝日の女であることを考えると、ヒルコ＝日の子という意味を持ついるとも考えられる。

代々の天皇は天照大神の声を聞くことができたようだが、彼女にはその能力が備わっていない。

天津結実らの計画した八岐大蛇を顕現させ、それに現世の罪穢れを乗せて流し遣る計画に同意し、物語中盤まではもっぱらこの計画に必要な神器の回収などに専念していた。

物語終盤では葦舟『大和』に乗船し、素戔鳴

尊率いる黄泉軍への迎撃総指揮をとった。そして忠尋が世界を崩壊させてしまってもなお諦めず、忠尋に世界を縫い直す道を示唆し、それを実現させるために高天原に殴り込みをかけた。世界再生後はそれになお異議を申し立てる素戔鳴尊を攻撃しながらも、胎内へ迎え入れその漂白の寂しさを埋めようとした。記紀神話の素戔鳴尊も葦原中国へ降るまでは母を求めて癪癪ばかり起こしており、まさに母を恋しがる幼子のようなものである。このわがままは究極的には母の胎内に戻りたいというものであり、日瑠子は世界再生が成っても、素戔鳴尊の寂しさを埋め、わがままを止めなければ問題は解決しないと考え、このような行動に出たと思われる。

日瑠子の祖神についての考察

最終話二では素戔鳴尊に「流浪姫(サスラヒメ)！」と呼ばれている。これは速佐須良比賣のことと思われるが、速佐須良比賣は天照大神の子孫にはあたらない。

推測としては、以下のように考えられる。天皇は本来天照大神の子孫であったが、南北朝時代以降何らかの事情でその系統が絶えた。代わりが必要となったが、その際に禊・祓の神である速佐須良比賣の子孫が罪穢れを背負って流すのに好都合であるため聖別されたマレビトとして天皇となることとなった。そのため速佐須良比賣の子孫である日瑠子は地上においては先祖ではない天照大神の声を聞くことができない。

ふ

ぶあい【蕪穢】

土地が荒れていること。

ふげき【巫覡】

シャーマン、神降ろし、かんなぎの総称。神の言葉を世俗の人々に伝える役割を持つ人。巫は女のかんなぎ、覡は男のかんなぎのこと。

ふこ【巫蠱】

巫は巫女、蠱はまじない師の意。巫女やまじない師のこと。

もしくは、まじないで人を呪うこと。

ふとまに【太占】

古代の占いの一種。木の棒の先に火をつけ、鹿の骨に押し当てて焼く。その際にできたり

の伝説の名前。概要は以下の通り。

山奥へ迷い込んだ者が偶然立派な屋敷に辿り着くが、そこには誰もいない。庭には花が咲き乱れ、家畜もたくさん存在し、豪華な食器も沢山並べられていて囲炉裏には鉄瓶がかかっていて湯も沸いている。しかし声をあげても誰も応える者はいない。迷い人はそこでしばらく休んだ後、椀などを持って屋敷を出ると、ようやく山を降りることができた。しかし再度その屋敷を訪ねようとしても二度と辿り着くことはできなかった。その者の家は後に繁栄し、大金持ちになったという。細部に違いがあるバリエーションが多数存在し、屋敷の呼び名も多数存在する。

まればと【マレビト】

漢字で書く場合は客人と書く。本来は字義通り来客のことを表す言葉だが、民俗学では常世より定期的に村落共同体へ来訪し、人々を祝福する霊的な存在のことを折口信夫がこう呼んでいる。その原型はその集落の祖霊であるという。具体的な形を持ったものとしてはなまはげなどがこれに当たるとされる。第二十一話一で天津彦根神が日瑠子を指してマレビトの一族と言っている。これは日瑠子が共同体から儀礼的に隔離された存在であるということ、つまり、普段は祭り上げられているが、災厄が生じた場合それを一身に引き受け殺される、古代の神主のような存在である、と言ったような意味合いであると思われる。

別の言い方をすると、禊祓えとはマレビトに罪穢れを背負わせ異界へ流し遣るということである。

ちなみに、マレビトを模する者はなまはげのように面を被るもので、なまはげの場合は鬼面だが、天狗面を使用する場合もある。

まんようがな【万葉仮名】

平仮名の発明以前は、送り仮名も漢字で記述していた。漢字は表意文字ではあるが、送り仮名として利用された部分の漢字の意味は無視し、発音だけを利用することをいう。第一話一での三姉妹の漢字だけの台詞に登場する小さいフォントの漢字がそれである。万葉集などで使われていたため、こう呼ばれる。ここで三姉妹が口にしてるのは「大祓

詞」である。

み

みいつ【御稜威】

威光、威勢のことを蔽（いつ）といい、その尊敬語。御威光、御威勢。

みずごり【水垢離】

神仏に祈願するとき、冷水を浴びて心身を清浄にすること。

みずち【蛟龍】

蛟とも。想像上の動物。水中に棲み、蛇または龍に似た形をし、角と四肢をもち、毒気を吐いて人を害する。一種の龍、あるいは龍になりきらない龍と考えられる。

みっきょう【密教】

秘密仏教の略。対する語は顕教で、顕教とはいわゆる大乘仏教のこと。大乘に対して、金剛乗ともいわれる。

教義を文書や会話で広く一般的に説く大乘仏教に対して、密教は秘密主義を取り、通常一人の師につき一人の弟子にのみ教義は受け継がれる。神秘主義的、象徴主義的な面が強い。また呪術的な要素も強く持っており、真言、マントラと呼ばれる呪文を唱えることにより現世での利益を受けようというもの。その世界を体系化し図に表したものが曼荼羅である。南朝が本拠とした吉野から紀伊、熊野にかけては密教が盛んな地域であり、後醍醐天皇本人もタキニ天を祀り、北朝方を呪術で調伏しようとしていたという説もある。

みどうしづか【御堂志津歌】

巫女委員会のひとり。

柚子に憧れて巫女委員会入りを決める。

名家の令嬢。ウガワさんによる他作品、『スタンダードブルー』、『官憲横暴ビーボくん』に登場した御堂家の人物の親戚と思われる。

自分が不運だと思い込み鬱ぎこんで、柚子を思いやる気持ちの余裕をなくしていた忠尋の頬を張り目を覚まさせるなどの行為に芯の強さをうかがわせる。

妖怪や黄泉軍と戦う際には弓を用いていた。

アニメ版

声優は大原さやか。妖怪や黄泉軍と戦う際には桧扇（ひおうぎ）を用いる。必殺技は桧扇

川に捧げられていた風習が廃絶されたことを表しているとも考えられる。尾から現れた天叢雲劍は、出雲国が古代製鉄の先進地域であり、質の高い刀剣を作成できたことを表している。特に斐伊川上流は非常に上質の砂鉄を産しており、これが周辺地域の製鉄に大いに貢献している。

八岐大蛇の腹が赤い血でただれているのは、斐伊川が砂鉄で赤く濁っていた様子を表しているとする説も存在する。

まったく別の解釈としては、古志とは越のことで、八岐大蛇とは北陸地方から攻め寄せた強力な軍勢のことである、とするものもある。

作中の八岐大蛇

船通山は素戔鳴尊を高天原から現世に送り込んだ、竜を象った埴船であり、同時に八岐大蛇であった。その制御装置が草薙劍である。朝廷は草薙劍を利用してこの埴船たる八岐大蛇を再生・制御し、素戔鳴尊が高天原から流されてきた時と同様に現世の罪穢れを載せて流すこととした。そして載せる罪穢れを誘引するためにこまを使用する。しかし八岐大蛇顕現後もこまの意識は残っていたようで、こまの忠尋に対する妄執を素戔鳴尊に突かれ制御不能となる。だが逆にこれが忠尋によって鎮静・消滅させられるきっかけともなった。

やまと【大和】

日本海軍の戦艦。大和型戦艦の1番艦。1937年11月4日起工、1940年8月8日進水。1942年)2月12日に連合艦隊旗艦となる。本艦の改良型同型艦「武蔵」がトラック島に進出する1943年2月までこの任を務める。1945年坊ノ岬沖海戦において轟沈。

作中では日瑠子のために用意された葦舟、九十九艦隊の旗艦が「大和」である(単行本では記載がないが、雑誌連載時には三十一話一の扉ページに「日瑠子帝御座船——九十九艦隊旗艦“大和”——」と記載があった) 日瑠子が乗艦し黄泉軍との戦いの総指揮を執った。官軍が敵陣突破後は「お舟入り」の儀にそのまま利用された。その際日瑠子の供をすると申し出た斎藤と同化し、装甲の外側に植物的な外装を纏う。また艦橋部には斎藤の顔と似た模様を持つ大木が生えた。日瑠子は千曳岩の破壊後この船で高天原まで向かい、世界再

生を求めて脅迫を行った。

世界再生が成った後は素戔鳴尊への攻撃を行い、最終的に素戔鳴尊を胎内へ受け入れた日瑠子を乗せ、流し雛を載せた舟のごとく現世を去った。

やまぶし【山伏】

山に伏すこと。野山に野宿すること。政争、戦争などに敗れ世を逃れ山中に住むこと。また、その人。

もしくは仏道修行のため山野に籠もる僧。あるいは、修験者のこと。一般的に天狗は山伏の姿で描かれる。いずれにしても山人の特性と共通する部分がある。

ゆ

ゆうぐれのたそがれ〜【夕暮れの黄昏時はなかりけり かく立ち寄れどとふ人もなし】

宇津保物語九卷『菊の宴』の一節。

ゆきかぜ【雪風】

日本海軍の駆逐艦。陽炎型駆逐艦8番艦。1938年8月2日起工、1939年3月24日進水、1940年1月20日竣工。

当時の新鋭駆逐艦であった、朝潮型駆逐艦、陽炎型駆逐艦、夕雲型駆逐艦、そして同型艦が建艦されなかった島風の計50隻の中で唯一終戦まで健在だった。16以上の主要な作戦に参加しつともほぼ無傷で終戦を迎えたため、「奇跡の駆逐艦」と呼ばれた。

坊ノ岬沖海戦にも居合わせたが、寺内艦長による、艦橋に椅子を置いて天井の窓から首を出し、航海長の右肩を蹴ると面舵、左肩を蹴ると取舵という操舵方法で米軍機の攻撃をほとんど回避した。他に魚雷とロケット弾を受けたが、魚雷は艦底を通過し、ロケット弾は不発だった。結果戦闘終了後もほぼ無傷であった。この海戦で無傷だったのは初霜のみである。

その後佐世保から舞鶴へ回航するが、舞鶴も空襲を受けるようになり、宮津へ移動した。宮津も機雷封鎖を受け同行していた初霜は機雷で沈没するが、雪風にはロケット弾が命中するも不発だった。このまま終戦を迎える。終戦後は復員輸送艦となり、水木しげるを含む1万3000人以上を運んだ。1946年12月30日、雪風は特別保管艦に指定され、戦時賠償